九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語表現史研究

森脇, 茂秀

https://hdl.handle.net/2324/1500466

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

区分	甲

論文題目

日本語表現史研究

氏　名　　森　脇　　茂　秀

論　文　内　容　の　要　旨

本研究の「日本語表現」とは、「日本語の特質を踏まえて、日本語による表現のもつ機構や構造を明らかにしようとする」ものであり、本研究は、「実証的研究」と「理論的研究」との整合性を図りながら、文学作品中の用例（実例）から、帰納的で、しかも着実な結論を得るように努めたものである。また、「日本語史」を複層的に捉えるために、「現代日本語」と「日本語史」とを相対的に考究すること、助辞（助詞・助動詞）や動詞等の、現代日本語研究の研究結果を参照することによって、史的考察の結論を得るという点に本研究の特色がある。

第一章は「接続史」に関する論考である。第一節は複合助辞「とて」の成立について、「と」と「て」の間に「いふ」「おもふ」の二語を想定し、「とて」は「対者の有無」という日本語の引用形式と関連し、「とて」の引用節は、「未然」「将然」が多数で、「現在の状態」「既然」「超然」は少数であること、「とて」の逆接用法は、意味の形式化した「いふ」の省略形であることを、第二節は「とて」の (1)引用節中の動作性の消滅(2)「（已然形プラス）ばとて」形の台頭(3)「とて」と「も」の複合助辞「とても」（現代語「っても」の介在）を明らかにし、現在の方言分布にその反映が見られることを指摘した。第三節は「さりとも･･･否定（じ）」形が中世以後衰退し、「さりとも･･･推量」形、「さりとも（後件省略）と」形へと集約し、「さりとも･･･否定（じ）」形を「さりとて･･･否定」形が包摂するという「さりとて」「さりとも」の衰退は、「接続詞的用法から副詞的用法へ」という史的変遷であることを、第四節「否定の『ばや』」は、接続助詞「ば」が「とて」と複合助辞化すると逆接用法化する、というプロセスへの類推により否定の助辞「ばや」が生じ、その語構成は「ば（接続助詞）プラスや（間投助詞）」であって、この語形を生

じた背景には「中古から中世へ」という、「接続法」の変遷が存していると結論付けた。

第二章は、助辞による「希望表現」に関する論考である。第一節は、「もが」形・「てしか」形を取り上げ、「てしか」形は、奈良時代には、言語主体の判断と心理を持ち、中古以降、言語主体の判断のみの用法に集約されてゆくこと、「もが」形は、「対象的希求」であったものが、「てしか」形は希望対象を限定し、「行為から対象へ」と「てしかな」の希望の焦点（フォーカス）が移行し、「もがな」と近似の性格を有するようになる等を指摘した。第二節は「ばや」を考察し、「ばや」と承接する動詞は「見る」系が約３割を占め、希望対象を例示強調する用法があること、「ばや」は引用節と承接する用例が多数を占め、引用節「と」「など」と承接する「ばや」は、希望対象の内容を表示する機能がある、等を指摘した。第三節は、「かし」が＜「詠嘆的」から「主体的」希望へ＞変容し、対象を限定する副詞句が重要な役割を担うこと、また「かし」自体には「対者に持ちかける」「対自性」は存しないことを指摘した。第四節は、中世前期の「がな」が、副詞句と呼応し「主体的希望表現」形式を担ったが、中世後期には「不定語」と「がな」が共起することで文が終止せず、後に続く用法（「副助辞用法」）が主用法となり、「不定語＋がな」が副詞句化する、「副詞句内に収斂された」ことで、「がな」は衰退したと結論付けた。

第三章は「比況表現」に関する論考である。第一節「似る」は、否定語と共起することが多く、「に似たり」形は漢文訓読語系であること、第二節では、「Ａ、Ｂに似る＋否定辞」で、Ａは具体的な事柄や抽象的な事柄であり、Ｂは「一般性」や「標準的」であること、第三節「ごとし」は、その使用者は社会的属性に関係なく、比較対象は具体的に捉えられ、また「役割語」的用法のみではない等を明らかにした。第四節「やうなり」は、「心情を含めたことがら」「目に見える状態」「他から推量される様子」であることを明らかにし、第五節では「やうなり」の「祈願・目的用法」は、「やうに」形のみであり、この用法は中世期から現れ、「べし」の衰退と、文末用法の他者への希求（希望）、依頼等との関連があることを指摘した。第六節「しく」は、肯定形として用いられるのは、上代に限られること、中古以降は否定辞と共起し、否定辞と共起しない場合は疑問詞と用いられるが、意味的には否定となること、倒置表現は「しかじ」に限定され、その文末は「む」などの「未定形」を表す助詞と共起することを指摘した。第七節は、引用節を導く「いふやう」は、現代語「ように」節の発話・祈願の内容であると同時に「言う」「祈る」という動作の目的・結果」を表す用法と共通性を有する、引用句を導く「やう」は、会話文に後行する動詞句に対して「結果・目的」を提示する用法として捉えることができると結論付けた。

第四章は「語史と方言」に関する論考である。第一節「すぐる」は、中古の場合、「比較の基準」を示す助詞と共起する用法があり、「基準・対象・目的」に対してよい状態であることを表すものである、等を明らかにした。第二節「かしかまし」は、その対象は、人間の発する「音声」であるが、「耳」に承接すると、自然に生じたり、人間が動作により生じた「音響」が対象になる、という用法の差異があり、和文語の語性を反映していることを指摘した。第三節「よも」では、平安時代においては引用句中に用いられ、「じ」と呼応し文が終止するが、中古後期になると文が終止せず、質的変容を見せることを指摘した。第四節は近世後期の九州大学蔵本『筑紫方言（つくしことば）』の翻刻を掲載し、第五節では「五島」という長崎県の島嶼部の言語を対象に、所謂「方言集圏論的分布」を示すものもあるが、全体として比較的成立の新しいものが多いこと、指定辞「じゃ」「だ」は共存した可能性がある等を述べた。また、五島福江方言の「表現文法」を明らかにすべく、『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』（成果報告書　Ａ４―003）の『方言文法調査項目リスト―天草篇―』（2001）の調査項目を参照し、第六節では、「詠嘆の表現」＜サ詠嘆法＞を、第七節では、「ゴタル」の用法についてそれぞれ報告を試みた。